



一条朝の「くひな」詠：和泉式部百首を起点として

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大学 現代システム科学研究科 現代システム 科学専攻 言語文化学分野 公開日: 2024-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸本, 理恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/0002000671

一条朝の「くひな」詠

―和泉式部百首を起点として―

岸 本 理 恵

はじめに

植物や動物が和歌に詠まれるとき、先行の和歌におけるイメージや表現が踏襲されて広がっている。例えば、『古今和歌集』夏部においてその八割を占める郭公は『万葉集』以来多く詠まれるもので、イメージを展開させながら以降も夏を代表する伝統的な歌ことばとして多く詠まれ続ける。しかし十世紀後半にもなると、『古今和歌集』の歌が和歌の基盤として重視される一方で、新しい和歌を模索する動きが顕著となってくる。四五〇〇首に及ぶ類題和歌集である『古今和歌六帖』の成立はその一つとして大きいものがある。そこに立項される事物は必ずしも古今集歌の範疇にとどまるものではなく、しかし同時代的に『枕草子』や『源氏物語』への影響の大きさはよく知られるところである。当時の歌ことばへの関心の高さや敏感さは、『枕草子』類文章段などにもよ

く表れている。

こうした新しい和歌のあり方を模索する流れの一つとして初期百首も挙げられるだろう。定数歌という形式の新しさだけでなく、そこには新しい歌の素材や表現が多く取り入れられていることでも知られている。本稿では、巨視的に作品ごとにその流れを追うのではなく、いちど「くひな」という歌語に絞って一条朝の頃すなわち十世紀後半から十一世紀初頭のこうした流れの一端を具体的に捉えてみたいと思う。「くひな」は水鶏、ヒクイナのこととされ、夏に日本に渡来する鳥。夏の和歌に、特にその声をとってあげて詠まれる。ただ、万葉以来の夏の鳥は郭公であり、水鶏を詠む歌は『古今和歌集』にも『後撰和歌集』にもなく、下って『堀河百首』でも題として採られることはない。しかし後述するように、『古今和歌六帖』『拾遺抄』をはじめ一条朝を中心とした時期に用例は集中する⁽¹⁾。新しく興った初期百首においても好忠などには

見られず、水鶏を詠むのは賀茂保憲女と和泉式部のみである。ところがこのように限定的でありながら、用例は『枕草子』や『源氏物語』など和歌に限らず散見される。そこで、新しい歌の詠み方を拓いた初期百首のうち和泉式部百首の詠を起点として、水鶏がどのようにとらえられたのかを分析しつつ、新たな歌語の広がりの様子を、以下にたどってみたい。

一 初期百首の「くひな」詠

和泉式部百首の水鶏の歌は、夏部の次の歌である。

夏の夜は槇の戸たたきかくたたき人だのめなる水鶏なりけり
(二五)

夏の夜に鳴く水鶏の声を、戸を叩くように聞きなし、その戸を「槇の戸」と表現して、恋人の訪れを想起させつつ、第四句で「人頼め」として、来ぬ人を待つ女の姿を描き出すとともに、第五句「水鶏なりけり」と、その音是水鶏の声であったと明かされる。

「夏の夜」を詠む歌は、

夏の夜のふすかとすれば郭公なく一声にあくるしののめ

(古今集・夏・一五六・紀貫之、和漢朗詠集・夏夜・一五五)

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづくに月やどるらむ

(古今集・夏・一六六・清原深養父)

など、『古今和歌集』以来その短さを詠むのが一つの定型である。しかも、『和漢朗詠集』上巻夏部には「夏夜」を項目として立て、そこに挙げられる和歌は、右の『古今和歌集』一五六番歌のほか、

夏の夜をねぬにあけぬといひおきし人は物をや思はざりけむ
(二五三)

郭公なくや五月のみじかよもひとりしぬればあかしかねつも

(二五四)

と、いずれも短夜を詠む。和泉式部百首においても、「夏の夜は」を初句とする歌がもう一首、

夏の夜はともしの鹿の目をだにもあはせぬ程に明けぞしにける
(二二二)

とあり、こちらは「ともし(照射)」という新しい素材をもつて、すぐに明けてしまう夏の短夜を前面に詠む歌となっている。

つまり、初句「夏の夜は」と始める二五番歌も、それだけで夏の夜の短さを想起させる。しかし、二句から三句にかけて「槇の戸」の掛詞から、「とたたきかくたたき」とあって、郭公のように一声聞こえるようなものではなく、鳴き続ける顕著な声が聞こえている。恋人の訪れかと思わせる水鶏の声が何度も聞こえ続けるのは、訪れを待つ女としては短い夏の夜であっても過ごしづらい夜であろう。そして下句を「人だのめなる水鶏なりけり」と、

一首の焦点は水鶏に集約して結ばれている。

曾根好忠から始まるとされる初期百首は、源順、源重之、藤原師輔（海人手子良集）などが制作し、恵慶、高遠も続く。女性のものとしても、重之女、賀茂保憲女、和泉式部、相模（初事百首・走湯百首）が知られる。これらが春・夏・秋・冬・恋の部を基本とした構成のもと、各部に一〇首や二〇首など一定数の歌を配しておよそ百首でひとまとまりとする形式を取り上げ、『堀河百首』以降の組題百首と区別して初期百首と呼ばれるが、その特徴はこうした形式だけではない。『古今和歌集』以来の和歌には見られない素材を多く取り入れ、さまざまな素材をいかに詠むかという取り組みも初期百首の特徴とされる。初期百首に詠まれる新しい素材は、先行する百首に依りつつ、少しずつ工夫や改編を加えて継承されていくものが多い。例えば先の「ともし」も、『重之集』（二五〇）・『好忠集』（毎月集・二七四）・『賀茂保憲女集』（六四）に見えている。

和泉式部百首の場合は、春・夏・秋・冬・恋の五つの部に約二〇首ずつ、計九七首で構成される。成立時期は特定できないが、和歌の表現としては先行の百首を継承し、特に同じく女性の重之女や賀茂保憲女の百首からの影響が大きく、この二つの百首よりも後と考えられている。

水鶏を詠む歌は、こうした初期百首にあつて、好忠や重之などに無く、わずかに賀茂保憲女が夏部に一首を詠むのみである。それが次の歌である。

人待てばたたく水鶏をそれかとはかなくあくる夏のよぞうき

（賀茂保憲女集・四六）

この歌も、初句「人待てば」とあつて訪れを待つ女の姿がある。戸を叩くような声で鳴く水鶏の声を、恋人の来訪かと思うものの、実は水鶏であるから待ち人は来ず落胆する、そのような夏の夜はつらいものだと言ひ詠む。和泉式部百首二五番歌と内容は類似するが、この歌は下句「はかなくあくる夏のよぞうき」と結ぶように、水鶏の声を恋人の訪れと聞き紛うことだけでなく、はかなく明けてしまふ夏の短夜に言及しそこに焦点を結ぶ点が和泉式部歌と異なり、「夏の夜」を詠む歌の定型を押さえている。

和泉式部百首に特に関係が深いとされる重之女百首には水鶏を詠む歌はない。歌のことばとしては、

夏の夜はまつ人もなき棋の戸にあげながらのみあかしつるかな

（重之女集・三三）

あたりが、和泉式部百首の水鶏の歌と関係が深いと思われる。初句を「夏の夜は」とし、「棋の戸」を詠んで、独り過ごす女の夏の夜の風情を描き出す点は共通していると言える。しかしこの重

之女歌は、はかなく明ける夏の短夜を詠む歌であつて水鶏とは関
わらない。

このように、初期百首においては特に水鶏を新しい素材として
継承していたとは言えない。一方で、詳しくは次に述べるように、
十世紀後半から十一世紀初頭には複数の用例が見られる。初期百
首の中において保憲女と和泉式部だけが詠む水鶏を、初期百首が
取り組んだ新しい素材の一つとして片付けるのは不十分であろ
う。そこで、水鶏がどのように用いられるのか、初期百首の枠を
越えて追つていくこととする。

二 「くひな」詠の系譜

水鶏を詠む歌は『万葉集』『古今和歌集』等になく、初例は、『能
宣集』(書陵部御所本三十六人集)に見える次の歌である。

ある人の、おもものを鳥のかたにまろがして、いひとよの
これといひて歌よむに、ほかにていひやりし

いひとよのかひとしきけばあぢきなくくひなさへこそ思ひや
らるれ
(能宣集・三三九)

和泉式部や賀茂保憲女のように鳴き声を「たたく」と取り上げる
こともなく、夏という季節や夜の様子も含まれず、歌語としての
定着を見るものではない。

『古今和歌六帖』には第六帖(鳥部)に「水鶏」を項目として
立て、次の一首を載せる。

水鶏だにたたけばあくる夏の夜を心みじかき人やかへりし

(古今六帖・第六・水鶏・四四九三)

下句「心みじかき人やかへりし」というのは、男が女のもとを訪
れたものの、戸が開くのを待たずに帰つたことを指すのであろう。
水鶏が叩くものとして、夏の夜に鳴く鳥として序詞のように詠ま
れている。水鶏が戸を叩き、叩くと戸が開くという縁から、夜が
明けることを掛けつつ、すぐに明けてしまふ夏の短夜と男の心の
短さを重ねる。心短き男は、先の和泉式部百首の歌の水鶏のよう
には何度も女の家の戸を叩くこともせず帰つたとも読める。当該
歌は『古今和歌六帖』の多くの歌と同じく詠作事情・年次や出典
など不明、歌集としての成立年は九七〇年代〜九八〇年前半とも
される。管見の限りこれより先行する、水鶏が「たたく」と詠む
歌は見いだせないが、わずか一首とはいへ鳥部の中に立項される
のは、既に水鶏を歌語として捉えようとする傾向が認められる。
また『古今和歌六帖』の影響力の大きさからすると、水鶏が歌語
として定着していく一端をここに見据えることができるであろ
う。

次の『仲文集』歌も、水鶏を叩くものとして捉えている。

院の大将殿のさぶらひに、くりやがねぬなはたたくをみて、おなじ人

くりやまちまだ宵なればねぬなはのわれらがくひなたたくりりけり
(仲文集・五一)

かへし、侍従の君

手もたゆくたたくひなも残らねばなほねぬなはのくりや苦しや
(同・五二)

水鶏そのものを詠む歌ではなく、厨で蓴菜(ねぬな)を調理する音をきっかけに、「たたく」の語から水鶏を導き出し、「食ひ菜」を掛ける。水鶏の鳴き声が戸を叩くように聞こえるという認識がここにも見える。それを男女の贈答に用いるのは、男が女の家を訪ねて来た際の戸を叩く音に水鶏の声を聞きなし、侍従の君(本院侍従)のもとへ男が来たこと暗に表現した、戯れ的な贈答と見られる。なお、この贈答は『仲文集』の中でも『国用集』の混入部分とされる箇所、国用と本院侍従の関係性から、九六〇年代後半から九七〇年代の贈答とされる²⁾。

これらの歌には、待つ女を苦しませるものとしての水鶏の声は詠まれない。しかし次の歌、

たたくとてやどの妻戸をあけたれば人もこず糸の水鶏なりけり

(拾遺抄・恋上・二六九、拾遺集・恋・八二二)

一条朝の「くひな」詠——和泉式部百首を起点として——

『拾遺抄』『拾遺和歌集』ともに恋部に配し、恋人が来て戸を叩くと思つて妻戸を開けてみると、それは人が来たのではなく梢で鳴く水鶏の声であつたという。和泉式部や賀茂保憲女の歌と同様に、女の落胆を思わせる。題不知・読人不知で詳細は不明ながら、『拾遺抄』に載ることから、九九〇年代末頃には知られた歌であつたらしい。

ところで、こうした水鶏の鳴き声を男の来訪と聞きまがうというのは、和歌表現として、待つ女の苦しさを表したり男の来訪を暗に示したりするのに有効であるが、現実的にはやや諧謔的な面もあるといえよう。直接的には男が戸を叩くことに重ねず、夏の夜の風情として捉える例もある。

一三日、月いとおもしろう澄みてあかし、八月十五夜の
もまたかかる時はなしなどいひて、寅の刻まで起きて見
る、みな人人の寝にたればほのぐらき奥つ方なまうとま
しくみゆれど、月を頼もし人にてながむるほどに、おま
へ近き梅の木に水鶏のいとをかしう鳴くに、かたみにを
かしと思ふ

月清みやすらふほどに折しもあれたたく水鶏におどろかれぬる

(大斎院前の御集・一六九)

とあれば、さい将

夏の夜は月みるほどもなきものをあけよとたたく水鶏なりけり

(同・一七〇)

などある事、をりからにやあらん、をかしとおぼゆ

まことに寅の貝吹くほどにおまへにまありて、かかる事

なんさぶらひつるときこえさすれば、あけがたになりぬ

るかとのたまはせて

やすらひて見るほどもなき五月夜をなにあかずとたたく水

鶏ぞ

(同・一七一)

右の一六九番歌は、水鶏の声が叩くように聞こえてはつとさせられると詠むが、詞書からすると現実に聞き紛うたものではない。先引の『古今和歌六帖』や『拾遺抄』の歌のように、水鶏の声を「戸を叩く」と表現することを受けて、その風情を歌にしたものである。だからこそ、それに応えた一七〇番歌では、水鶏そのものを中心に捉え、戸ではなく「夜が明ける」ことを求める声だと詠む。詞書では五月一三日の美しい月夜、折しも水鶏が鳴く声を齋院の女房たちは「をかし」と捉え、一七一番歌では選子内親王に報告もして唱和している。先引の『拾遺抄』のような歌を想定して「をかし」と思うのかもしれないが、男の来訪かと聞き紛う諧謔的なものとは距離を置き、短くも飽かず美しい夏の月夜に水鶏の声を聞く風情を捉えている。この贈答は配列から九八五年五

月のものとされる⁽³⁾。

この贈答の流れを受けてか、『花山院歌合』では水鶏が題となる。その歌も、

くひな 左

いちこ

むかしよりあけがたからぬ夏の夜をいかにとたたく水鶏なる

らむ

(花山院歌合・一四)

右

院御

夏の夜はたたく水鶏にほどもなく天の戸とくもあけにけるかな

(同・一五)

と、すぐに明けてしまふ夏の短夜を詠み、先に見たような男の訪れを思わせる要素を入れない。水鶏が叩くのは、夜が明けることを促すものであり、そうであるから、右歌(一五)は「天の戸」を用いる。『大齋院前の御集』一七〇番歌で宰相が詠んだように水鶏が「あけよとたたく」結果、『花山院歌合』一五番歌は「ほどもなく」「あけにける」と、天の戸が早くも明けてゆく。「夏の夜は」を初句に置くこの二首は内容も呼応するかのようであるとともに、水鶏を詠みつつも、夏の短夜の詠として存在している。『花山院歌合』は正暦年間(九九〇～九九四年)の開催とされ、一番からなる小規模ながらも、水鶏のほか、「蛭」「蚊遣火」など新しい題を設定することで知られる。

こうしてみると、一〇世紀後半に見え始める水鶏が、その鳴き声を「たたく」と捉えることを共有しながら、男の訪れを思わせるものとしても、あるいは夏の短夜を表現する素材としても、新しい歌ことばとして同時代的に広がっているようである。すると、初期百首のなかでも賀茂保憲女まで水鶏が見えないのは、水鶏を和歌に詠む語として着目される時期と関わるのではないか。人の訪れと聞き紛う水鶏の声は、女の歌に取り入れやすいという面はあるかもしれないが、先引の『大斎院前の御集』や『花山院歌合』の歌のように、恋の要素を外して夏の夜を詠むことも可能なはずである。天禄末ともされる好忠やそれを受ける重之などが新しい歌語を多くとりあげるのに水鶏を詠まないのは、歌語としてまだ着目も定着もなかったと考えるのが穏当であろう。初期百首が取り入れることで広がっていく歌語や表現はさまざまあるが、水鶏については、『古今和歌六帖』や『大斎院前の御集』・『花山院歌合』のような、私的な贈答を越えた場でも詠まれる素材となる中で、賀茂保憲女百首に、独り夜を過ぐす女のモチーフとしてもふさわしく、夏の短夜を詠むにもふさわしい新しい素材として取り入れられたものということになるう。

ところで、『紫式部集』には水鶏を交えた二組の贈答がある。いずれも紫式部が宮仕えをしていた頃、右に見た歌とは少し年次

が下って一〇〇〇年を少し越えた頃と思われる。

うちに水鶏のなくを、七八日の夕づく夜に、小少将の君
天の戸の月のかよひぢささねどもいかなるかたにたたく水鶏ぞ

(紫式部集・七二)

返し

楳の戸もささでやすらふ月かげになにをあかずとたたく水鶏ぞ

(同・七三)

小少将の君と紫式部が、月夜に水鶏の声を聞きつけて歌を交わす。小少将の君の歌が水鶏の叩く戸として捉える「天の戸」は、『花山院歌合』一五番歌に見える語である。紫式部の返歌は、第二句に「やすらふ」の語を用い、下句が『大斎院前の御集』一七一番歌「やすらひて見るほどもなき五月夜をなにをあかずとたたく水鶏ぞ」と全く同じである。「やすらふ」は『大斎院前の御集』一六九番歌にも詠まれる。しかも『大斎院前の御集』も、月の美しい夜に水鶏の声が聞こえる夜の風情を女房が贈答するものであった。この『紫式部集』の贈答には含意をもって交わされたいるともされるが⁽⁴⁾、少なくとも『大斎院前の御集』の風情を取り込んだ贈答であることは確認できよう。また、この下句「なにをあかずとたたく水鶏ぞ」は、『源賢法眼集』にも、

さらでだにふすかとすればあくるよをなにをあかずとたたく

水鶏ぞ

(源賢法眼集・一八)

と見える。詞書がなく詳しい詠作事情や年次は未詳ながら、一〇二〇年に没する源賢の詠として『大齋院前の御集』との一致が目され、その影響力が見える。なお、『大齋院前の御集』には先の三首の他に、水鶏をめぐる贈答がもう一組二首見える⁽⁵⁾。

さらに、『和泉式部集』には百首歌以外にも、

来むとたのめて、見えずなりにける、つとめて

水鶏だにたく音せば槿の戸を心やりにもあけてみてまし

(和泉式部集・七九八)

とあり、こちらは男の来訪を前提とし、百首歌と同じく「槿の戸」を詠む。先の『紫式部集』七三番歌も七二番歌が「天の戸」というのを「槿の戸」と受けるのは、和泉式部百首あたりの歌と関わるものであるか。その『紫式部集』にも、右の贈答に続く七四・七五番歌も水鶏を用いた贈答が次のように見える。

夜ふけて戸をたたきし人、つとめて

夜もすがら水鶏よりけになくなくぞ槿の戸口にたたきわびつる

(紫式部集・七四)

かへし

ただならじとばかりたたく水鶏ゆゑあけてはいかにくやし

らまし

(同・七四)

『紫式部日記』にも見え、やはり「槿の戸(口)」を詠みみ込む七四番歌は、その後『新勅撰和歌集』では、道長との贈答として入る歌である。

また、『大式三位集』には、

さまざまの題を人人よみしに、水鶏を

よもすがらたたく水鶏に槿の戸をすむ月かげやさして入るらん

(大式三位集・三八)

とある。詠作年は未詳ながら、詞書には水鶏が歌題となっていたことが記される。その他にも、『定頼集』に一組二首の贈答(二九二・二九三)、勅撰集では『後拾遺和歌集』に大中臣輔弘の一首(夏・一七〇)が入集する。内裏歌合などの題には見えないが、定着し始めた様子をうかがわせるものがある。

その後は『堀河百首』題となることもなく、結果的には大きな広がりを見せることがない。しかし『古今和歌六帖』の影響力と相まって、大齋院の贈答や『花山院歌合』あたりが歌ことばとして格を高め、局所的に、一条朝を中心とした期間には新しい感覚で好まれていった様子がかがえる。

三 歌語「くひな」の広がり

水鶏が歌ことばとして定着していこうとする様子を右に検証し

たが、実は散文作品においても、和歌と同じ時期に水鶏が散見される。『枕草子』「鳥は」(三九段)に、

鳥は こと所のものなれど、鸚鵡いとあはれなり。人の言ふらむことをまねぶらむよ。ほととぎす。水鶏。鳴。都鳥。ひは。ひたき。

と見える(6)。名称を挙げるのみで詳細は記さないが、郭公・鳴・都鳥とならぶのは、歌ことばとしての連想からと思われる。『枕草子』は和歌的な発想を基とし、特に類従章段は『古今和歌六帖』との深い関係が指摘される。『枕草子』のこの一文は、そうした歌ことばに敏感な定子サロンや清少納言たちに、広がり始めた新鮮な歌ことばとして水鶏が捉えられていたことを示しているものであろう。

『源氏物語』にも、水鶏は「明石」「落標」の二箇所に見える。明石の浦に移った源氏が、四月の「のどやかなる夕月夜」、琴を弾きながら入道と語る場面において、風情ある邸の様を次のように表現する。

なかなか春秋の花紅葉の盛りなるよりは、ただそこはかとう茂れる蔭どもなまめかしきに、水鶏のうちたたきたるは、誰が門さしてとあはれにおぼゆ (源氏物語・明石)

都にも劣らぬ趣あるさまに造られた入道邸に、水鶏の声がさらに

情趣を添える。水鶏が鳴くことを「うちたたきたる」と表現するうえ、「誰が門さして」は引き歌を思わせ(7)、夏の月夜に水鶏の声が聞こえることが、和歌的な情趣として定着していることをうかがわせる。夏の月夜に水鶏の声が情趣を添えるさまは、先に『大斎院前の御集』に見た情景と重なるものである。

「落標」では、都に戻った源氏が五月雨の頃、ようやく花散里のもとを訪れた時の様子を、次のように語る。

西の妻戸に夜更かして立ち寄りたまへり。月おほろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ尽きもせず見えたまふ。いとどつつましけれど、端近ううちながめたまひけるさまながら、のどやかにてものしたまふけはひ、いとめやすし。水鶏のいと近う鳴きたるを、

水鶏だにおどろかさずはいかにして荒れたる宿に月をいれまし

いとなつかしう言ひ消ちたまへるぞ、「とりどりに捨てがたき世かな。かかるこそなかなか身も苦しけれ」と思す。

「おしなべてたたく水鶏におどろかばうはの空なる月もこそいれ

うしろめたう」 (源氏物語・落標)

花散里が端近くに眺めていたのは、五月雨の合間に出た月を見な

がら訪ねてくるはずのない源氏を思っていたのであろうか。そこに源氏が来訪し水鶏が鳴くのは、和泉式部百首が「人だのめなる水鶏」と言い、『拾遺抄』で「人もこずゑのくひななりけり」と詠まれた、女を落胆させてきた水鶏とは裏腹な面白さがあるとともに、夏の月夜の情趣を加え、趣ある再会の贈答を美しく作り上げてゐる。花散里の歌は、『古今和歌六帖』四四九三番歌と同じく「水鶏だに」と初句を置く。先に見たように水鶏が新しい歌ことばとして好まれていたことを考えると、咄嗟ながらも水鶏の声を捉えて詠み入れるのは、花散里の魅力を引き立たせてもいるものであろう。この場面も月が描写され、月に男を重ね、また月を入れるというのは、『大齋院前の御集』からの流れに一段の発展を見せるし、『紫式部集』の小少将君との贈答と重なるものがある。

さらに、『蜻蛉日記』にも、一例ながら水鶏の語が見える。兼家から離れて自ら鳴滝に籠った、その閑寂な山寺の様子を、次のように記す。

木蔭いとあはれなり。山陰の暗がりたるところを見れば、蛩は驚くまで照らすめり。里にて、昔もの思ひうすかりし時、「二声と聞くとはなしに」と腹立たしかりし郭公も、うちとけて鳴く。くひなはそこと思ふまでたく。いとみじげさまさ

るもの思ひの住みかなり。（蜻蛉日記・天禄二年六月）

この箇所、蛩の表現は、「さよふけて我が待つ人やいまくとおどろくまでも照らす蛩か」（古今六帖・第六・蛩・四〇一四）を引き、待つ人が来ることに心が動く様を醸し出す。郭公にも「ふた声と聞くとはなしに郭公夜深くめをもさましつるかな」（後撰集・夏・一七二・伊勢、拾遺集・夏・一〇五・伊勢、古今六帖・第六・郭公・四四三五）を引く。この引き歌そのものは山寺に郭公が多く聞こえることを言うのであろうが、郭公は「郭公人まつ山になくなれば我うちつけにこひまさりけり」（古今集・夏・一六二・紀貫之）など、物思う人の心をさらに悩ませるものである。水鶏についても、「鳴く」とせずに「たく」とするのは、やはり和歌に由来する風情を取り込んでいると捉える必要がある。具体的な引き歌の有無は明らかではないが、蛩も郭公も男の訪れを思わせる表現に沿ったものを並べているからには、水鶏もその声によって、先に和歌の例で見たような、人が来たと思わせること、さらにはそれが人ではないことに落胆して乱れる女の心を含んでいる。自ら山寺に籠り、追ってきた兼家を返している一方で、蛩や郭公や水鶏によって、兼家の来訪を待つ自身の心を認識させられるからこそ、「いとみじげさまさるもの思ひの住みかなり」というのであろう。

注目されるのは、この箇所は天禄二年（九七一）のものということである。先に見た和歌の例では、『古今和歌六帖』や『仲文集』（『国用集』混入部）が早いものであった。『蜻蛉日記』の執筆は記載される出来事の年次とは別に考えなければならぬが、記事の最終年の天延二年（九七四）頃としても、『古今和歌六帖』の成立や『仲文集』の贈答の推定される年次とほぼ同時である。九八〇年代に入る大斎院サロンでの贈答や『花山院歌合』よりも前ということになる。そのような時期にこの『蜻蛉日記』の表現は可能なのであろうか。少なくとも、この表現が書かれた時期や『蜻蛉日記』の成立を道綱母の没年（九九五年）頃まで引き下げたとしても、新しい歌語として広まりつつあった水鶏を敏感に取り入れた表現といえる。水鶏が歌に詠まれるようになるのと『蜻蛉日記』に引き歌のように用いられたのは同時的なのではないか。道綱母も紫式部も清少納言も歌詠む人であったとはいえ、積極的に新しい歌語が散文にも入っている。歌語が広まる速さがここに見える。

おわりに

平安朝の作品は成立年を特定するのは難しく、個別的和歌が詠まれた年月日となるとさらに困難ではある。しかし、以上見てき

た水鶏の歌について、大まかなに流れを次のように捉えられる。戸を叩くような声で鳴く水鶏として和歌に詠むのは、『古今和歌六帖』や国用の贈答歌が早く、九六〇年〜九七〇年代のものと考えられる。次いで『大斎院前の御集』には二箇所計五首が、夏の夜の風情ある光景として捉えて詠んだ。

その他の作品も成立年について推測を交えることにはなるが並べてみる。九九〇年〜九九四年『花山院歌合』が題として水鶏を取り上げた。これに重なるのが賀茂保憲女百首で、九九三年冬から翌春の詠作ともされる⁽⁸⁾。和泉式部百首はこの影響下にあるとされるもので、その少し後となる。『枕草子』も一次的な成立は九九六年頃と目され、これに連なる。『拾遺抄』は九九九年には既に流布していたとされるので、成立および編纂段階は九九〇年代半ばもしくは前半も視野に入ってくる時期である。つまり、『古今和歌六帖』歌や『大斎院前の御集』の影響力のもと、九九〇年代前半に大きな流行を見て取れるように思われるのである。

とすると、『枕草子』や『源氏物語』に『古今和歌六帖』の影響を、和泉式部百首には先行百首の影響と、個別的な影響関係で論じるのではなくもう少し広い視野で歌ことばの広がりを論じなければならぬということである。『枕草子』「鳥は」も、こうし

た大きな流れの中にあつて、水鶏をその新鮮さを捉えて挙げてい
るものであろう。百首歌についても、賀茂保憲女や和泉式部が百
首に水鶏を詠み入れたのは、好忠からの百首の継承ではなくこう
した流れに位置づける必要がある。加茂保憲女百首には新しい素
材が多く、それは孤独な営為の中で独自に見出したとも指摘され
るが⁽⁹⁾、水鶏についてはこうした流れの中にある新鮮な歌語を
敏感に取り入れたものと言わねばならない。和泉式部百首はこの
流れを受けて水鶏を詠む。和泉式部百首に大きく影響を与えた重
之女百首は女の百首であるのに水鶏が詠まれない。重之女百首の
詠作年は永観二年（九八四）と推測する説があり⁽¹⁰⁾、とすれば、
九九〇年代前半の流行よりも『大斎院前の御集』の贈答よりも前
であるから、水鶏を詠まなかつたのは取捨選択の結果というより
も、この微妙な年次の差にあると見るのが妥当であろう。『蜻蛉
日記』についても、この流れを考えると、作品の成立はともか
くとして、水鶏の記述は出来事の年次よりも下つて考えるのがよ
いかもれない。

水鶏を歌合の題として初めて取り入れた『花山院歌合』は、郭
公・卯花・橘・夏草・螢・瞿麦・蚊遣火・水鶏・祝・恋の一〇題
からなり、小規模ながら新しい題を多く設定したことで知られて
いる。このうち祝・恋を除く八つの題のモチーフは、賀茂保憲女

百首にも、和泉式部百首にも詠まれる。右の『蜻蛉日記』の箇所
もまた、螢・郭公・水鶏を並べている。本稿では詳しく取り上げ
なかったが、螢もまた、『古今和歌六帖』が立項して六首を挙げ、
寛和二年（九八六）六月の内裏歌合で初めて歌合題となるなど、
夏の夜に光つて飛ぶものとしては、この頃から盛んに和歌に詠ま
れるようになる。『大斎院前の御集』に螢が見えるのも、そう
した新しい歌語をさまざまに取り入れる、急速に広まっていく様
子の一端を見せているものと言えよう。『花山院歌合』の歌人に
河原院歌人が多く、また河原院歌人と和泉式部、道綱母、賀茂保
憲女などの人的交流も歌語の拡大には指摘される要素ではある。
しかし、大斎院サロン、のちに彰子サロンで紫式部たち、さらに
道長や定頼や相模にも水鶏を詠む歌があることを考えると、特定
の集団や個別的な影響関係だけでなく、この時代に大きな広がり
をもつて享受された様子、そしてその新鮮さを理解する必要があ
らう。

注

和歌の引用は『新編国歌大観』に、散文の引用は『新編日本古典文学全集』による。ただし、一部表記を改め、適宜傍線を付した箇所がある。

- (1) 飯塚ひろみ『源氏物語歌ことばの時空』（翰林書房：二〇一一年）第一章「水鶏の文学史―平安朝和歌にみる「水鶏」―」（同志社女子大学大学院文学研究科紀要）五：二〇〇五年三月初出）、第二章「源氏物語」の「水鶏」をめぐって」（『古代文学研究』一四：二〇〇五年一〇月初出）にも指摘がある。
- (2) 片桐洋一・小倉嘉夫・金任淑ほか『藤原仲文集全釈』（風間書房：一九九八年）この注では五一番歌について、国用自身が本院侍従のもとに訪ねてきたことを「われらがくひなたたくなりけり」と表現したものと解している。
- (3) 石井文夫・杉谷寿郎・久保井妙子『大斎院前の御集注釈』（貴重本刊行会：一九九二年）
- (4) 久保朝孝『紫式部日記』注釈史の余りもの——小少将の君との「水鶏」の贈答歌をめぐって——（中野幸一編『平安文学の風貌』武蔵野書院：二〇〇三年）に、先行諸注にも詳しく触れながら言及がある。
- (5) 『大斎院前の御集』八六・八七番歌。
- (6) 引用は三巻本による。諸本に異なる多い段ではあるが、主要な諸本にはすべて水鶏が見える。一例として前田本は、「鳥はかはちどり」から始まり、途中に「こと所なれど、あふむ、いと」とあはれなり。くひな。しぎ。水どり。ひばり。ひわ。ひたき」とある。
- (7) 『源氏積』は「まだ宵にうち来てたたく水鶏かな誰が門さして入れぬなるらむ」を挙げる。

一条朝の「くひな」詠——和泉式部百首を起点として——

- (8) 岡一男『古典の再評価』（有精堂：一九六八年）
- (9) 渦巻恵『賀茂保憲女集新注』（新注和歌文学叢書一五・青簡舎、二〇一五年）解説。
- (10) 渦巻恵・武田早苗『重之女集重之子僧集新注』（新注和歌文学叢書一七・青簡舎、二〇一五年）解説。

（きしもと）りえ・関西大学文学部教授

